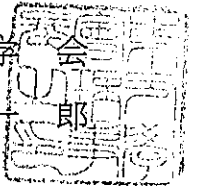


2019年9月25日

関 係 各 位

一般財団法人 東 方 学 会
理 事 長 小 南 一 郎



ポスター掲示のお願い

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

平素は本会事業活動にご協力を賜り深謝申し上げます。

さて、本会主催の秋季学術大会を、同封プログラムのとおり、来る11月9日(土)に日本教育会館に於いて開催いたします。つきましては、ご多用中恐縮ながら同会議周知のため、ポスターのご掲示をお取り計らいいただきたくお願い申し上げます。

尚、本会が所属しております東洋学・アジア研究連絡協議会でも12月14日(土)に東京大学に於いてシンポジウムを開催いたします。こちらのポスターもご掲示いただければ幸いです。

以上書面にて略儀ながらご高配のほどお願い申し上げます。

敬具

〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-4-1

Tel.03-3262-7221 Fax.03-3262-7227

E-mail: iec@tohogakkai.com

URL:<http://www.tohogakkai.com>

一般財団法人 東方学会
令和元年度秋季学術大会開催案内

東方学会では令和元年度秋季学術大会を来る11月9日(土)、日本教育会館において下記の通り開催いたします。どなたでもご参加いただけます。参加ご希望の方は、準備の都合上10月31日(木)までに、住所・氏名・所属を明記の上、Fax又はE-mailでお申込みください。

連絡先：101-0065 東京都千代田区西神田2-4-1 東方学会
Fax. 03-3262-7227, E-mail: iec@tohogakkai.com

参加費：1,000円 懇親会費：3,000円

記

日時：令和元年11月9日(土) 午前10時～午後7時30分

会場：日本教育会館8階会議室

(千代田区一ツ橋2-6-2 Tel. 03-3230-2831)

開会 午前10時 (801・802会議室)

挨拶：東京支部長 齋藤 明

講演会 10時15分～12時20分 (801・802会議室)

10:15-11:15 カラバルガスン碑文のソグド語版について 京都大学大学院文学研究科教授 吉田 豊

講師紹介・司会：京都大学人文科学研究所教授 稲葉 稔

11:20-12:20 秦始皇帝研究の回顧と展望 学習院大学文学部教授 鶴間 和幸

講師紹介・司会：早稲田大学教育・総合科学学術院教授 石見 清裕

シンポジウム 午後1時20分～5時10分

I. 「長期の18世紀」と海域アジア——港市と農村の社会変化 (司会：島田竜登) (803会議室)

1:20-1:30 趣旨説明 (東京大学准教授 島田 竜登)

1:30-2:00 近世の港市長崎と唐船貿易——売込人を中心に 大阪市立大学准教授 彭 浩

2:00-2:30 18世紀インド西海岸の港市スーラトの商人社会と東インド会社
——オランダ東インド会社の役割の検討から 東京大学大学院生 嘉藤 慎作

2:30-3:00 徴税請負制度からみる「長期の18世紀」ベトナムの経済変容 日本学術振興会特別研究員 多賀 良寛

3:10-3:40 貨幣と借金証文からみる18世紀ビルマ農村の経済変化 東京外国語大学名誉教授 齋藤 照子

3:40-4:10 地稅徴収制度にみる18-19世紀のインド西部の農村社会の変化 金沢大学准教授 小川 道大

4:10-4:40 コメント (立教大学名誉教授 弘末 雅士)

4:40-5:10 討論

II. アジアにおける個の尊重の概念史——多様性と通底性 (司会：小島 毅) (801・802会議室)

1:20-1:30 趣旨説明 (東京大学教授 小島 毅)

1:30-2:00 中国近代の尊嚴概念——魯迅の小説を通して 二松學舎大学教授 牧角 悦子

2:00-2:30 如空の衆生を度す——仏教思想における個の否定と尊重 創価大学教授 前川 健一

2:30-3:00 日本近世を生きる人びとの思想形成を考える 一橋大学教授 若尾 政希

3:10-3:40 日韓関係における尊嚴概念の構築 京都大学教授 小倉 紀蔵

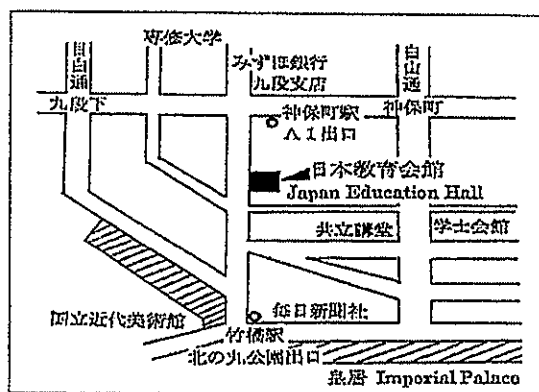
3:40-4:00 コメント (一橋大学教授 加藤 泰史)

4:00-5:00 討論

5:00-5:10 総括

第38回東方学会賞贈呈式 午後5:20～5:40 (会務報告 5:40～6:00) (801・802会議室)

懇親会 午後6:10～7:30 (9階“芙蓉の間”)



シンポジウム「近未来の東洋学・アジア研究—王権・元号・暦—」

日時：2019年12月14日（土）13時30分～17時

会場：東京大学法文2号館1番大教室（文京区本郷）

開会挨拶：斎藤 明（国際仏教学大学院大学教授、東洋学・アジア研究連絡協議会会長）

総合司会：池澤 優（東京大学教授）

報告：中牧弘允（吹田市立博物館館長）：アジアにおける権力と権威—年号と紀年法をめぐるダイナミズム

小島 毅（東京大学教授）：正朔を奉ずるといふこと—儒教王権の時間支配

青山 亨（東京外国語大学教授）：ジャワにおけるシャカ暦—インド化とイスラーム化をつなぐもの

矢野道夫（京都産業大学名誉教授）：インドにおける暦

後藤裕加子（関西学院大学教授）：春分と十二支—サファヴィー朝年代記のトルコ暦採用

閉会挨拶：小南一郎（京都大学名誉教授、東方学会理事長）

予約不要・入場無料

〔報告レジュメ集〕

中牧弘允：アジアにおける権力と権威—年号と紀年法をめぐるダイナミズム

中国とその周辺諸国の年号や紀年法をとりあげ、権力と権威をめぐる歴史のダイナミズムを考察したい。とくに19世紀以降の近代化において、年号の廃止がみられる一方、他方では西暦(キリスト生誕紀元)に対抗するかたちで皇紀、民国暦、道暦(黄帝紀元)、檀紀、主体年号などが登場した。それらは国家主義や帝国主義との関連が強い。明治の年号をもつ大理国、大正の年号を有したベトナムの阮朝なども射程に入れ比較検討を試みたい。

小島毅：正朔を奉ずるといふこと—儒教王権の時間支配

東アジアの伝統的な暦は太陽と月の両方の運行を勘案・調整する太陰太陽暦である。各月の日数が不定であるため一年の日付の決定は複雑になる。これには天体の運行を正しく観測・予想して計算する高度な技術が必要で、天命を受けた中華の君主の役割でありかつ権威の源泉だった。理念的には全世界がこの暦を使うべきであり、朝貢国はこの暦を下賜されるかたちで使用することが求められた。報告ではこの理論とその運用実態について紹介する。

青山 亨：ジャワにおけるシャカ暦—インド化とイスラーム化をつなぐもの

ジャワではインドのシャカ暦に由来するサカ暦が古代から近世まで使われた。その使用がインド文化の受容と不可分であることは、14世紀の宮廷歴史物語『デーシャワルナナ』において、王国の事件の時を記す暦としてのみならず、宇宙論的終末期カリ・ユガへの言及でサカ暦が使用されていることに如実に示されている。イスラームが浸透する17世紀になると、ジャワのスルタンはサカ暦にヒジュラ暦を「接ぎ木」することで二つの文化の調停を図った。

矢野道雄：インドにおける暦

インドでは古代から「天体の学」(ジョーティシヤ)は一方では祭式学の一部の暦法として、他方では占いの中心の占星術として学問の中核であった。多様な文化の中にあつて、シャカ暦、ヴィクラマ暦、カリユガ暦などの紀年法は亜大陸全体で共通である。また民間暦(パンチャーンガ)は様々な地方的特徴を保ちながら祭式と占いの両面で現在に至るまで生活の基本になっている。本講演では暦に視点をおいてインド文化の特徴を考える。

後藤裕加子：春分と十二支—サファヴィー朝年代記のトルコ暦採用

近代以前のイスラーム諸王朝では、財務に地域固有の太陽暦を用いても、公的な記録には太陰暦のヒジュラ暦が使われた。16世紀初めにイラン高原に成立したサファヴィー朝では、年代記叙述に支配者の即位年と十二支を紀元とする太陽暦を導入するようになる。トルコ暦と呼ばれた太陽暦の元旦はイラン古来の太陽暦と同じく春分に置かれ、元旦は宮廷の祝祭行事となっていく。本報告では、サファヴィー朝の王権誇示手段のひとつとしてのトルコ暦採用について考える。